William Faulknerの*The Wild Palms*とRichard Wrightの"Down by the Riverside"における1927年のミシシッピ川大洪水

The Great Mississippi Flood of 1927 in William Faulkner's *The Wild Palms* and Richard Wright's "Down by the Riverside"

中　地　　幸
NAKACHI Sachi

[Abstract] Hurricane Katrina caused extensive damages to the Delta area including New Orleans. It was devastating for people who need special health care, especially pregnant women. They are considered one of the most vulnerable populations because they are susceptible to infections. It is no wonder that many writers are interested in pregnant women when they describe flood disasters in their novels. Both William Faulkner and Richard Wright wrote about pregnant women during the time of the Mississippi flood of 1927 in their works. In this paper, I would like to examine the descriptions of pregnant women by both writers, focusing on women's reproductive health issues in the 1920s and 1930s.

Key Words: William Faulkner, *The Wild Palms,* Richard Wright, *Uncle Tom's Children,* "Down by the Riverside," Mississippi Flood of 1927, women's reproductive health

はじめに

2005年８月にニューオーリンズを襲ったハリケーン・カトリーナの被害は、先進国アメリカの災害に対する脆さを露呈すると同時に、イラク戦争を強引に押し進めるブッシュ政権に影を投げかけた。市内に取り残された車を持たない黒人貧困層への政府の対応の悪さに対し多くの市民が不満を募らせた。この緊急事態にあって、強盗や殺人などが多発し、ニューオーリンズ市内は混乱を極め、市民は治安の悪化に恐れをいだいた。また洪水による感染症流行の恐れも早くから取上げられたが、市民は不衛生な状態に悲鳴を上げた。何よりも食料などの物資の支給の遅れ、また避難所での混乱に対して、「これがアメリカか」という声が何回も繰り返された。多くの市民が長期にわたる避難生活を強いられ、多くの人々が経済的、精神的なダメージに今なお苦しんでいる。とりわけ健康問題は現在の課題として重要である。ハーバード公衆衛生大学院（HSPH）の保健政策が専門のRobert J. Blendon教授が監督を行った調査によれば、被災者の52%の人々はハリケーンによる被害をカバーする健康保険に入っていなかった。また保険に加入している人も、その34%はメディケイド（低所得者医療扶助）であり、16%はメディケア（高齢者・障害者医療保険）であるという。また被災者全体のうち33%の人はハリケーンによって負傷しているか健康に問題を抱えており、そのうちの78%は現在、治療を受けているという。[1]

アメリカのハリケーンによる災害は今に始まったことではない。過去を振り返れば、テキサス州を襲った1900年のハリケーン・ガルベストンは8000人以上もの死者を出している。また1992年のハリケーン・アンドリューもハリケーンの規模としてはカトリーナと同様、最大風速70マイル以上の最大級カテゴリー５に属するもので、被害総額は2004年までには最大の265億ドルに達した。[2] ちなみに、ハリケーン・カトリーナでは、最悪の人的災害は避けられたものの、その被害総額は1250億ドルという未曾有の額である。[3] この中で1927年のミシシッピ川大洪水はアメリカ文学の記憶の中に書き込まれてきたという意味で興味深い。ミシシッピ州グリーンヴィルなどの深南部の町を浸水させたこの洪水は、William Faulkner, Robert Frost, Langston Hughes, Zora Neal Hurston, Richard Wrightなど多くのアメリカ作家たちにより描かれている。これらの作家たちは1927年の洪水を憎悪に近い感情を持って描写している。例えば、Hurstonの*Their Eyes Were Watching God* (1937)において洪水は主人公Janieと恋人のTea Cakeの運命を大きく狂わせるものである。小説の結末においてJanieは狂犬病で苦しむTea Cakeを銃殺するが、そもそもTea Cakeは洪水の時に野犬に噛まれて狂犬病になってしまったのである。しかもTea Cakeは命からがら避難した町で、怪我をしているにもかかわらず、洪水による死体の始末のための労働に従事させられる。この作業では死体の人種を判別することが求められる。黒人の死体はそのまま地面の穴に投げ込まれるが、白人の死体には棺桶が用意されるのである。このような人種差別的な労働をTea Cakeは強制的にやらされるわけだが、Hurstonの作品は1927年の災害時においてアフリカ系アメリカ人が置かれた状況を伝える歴史的な資料となっているともいえよう。洪水時の強制労働についてはFaulknerもWrightも小説の中でとり扱っているが、Hughesも1927年の大洪水でアフリカ系アメリカ人たちが堤防補修の労働に強制的にかり出されたことを“Mississippi Levee”というブルース形式の詩の中で批判している。[4]

このように1927年の洪水を見据えた作家たちの視線は、災害弱者の立場に立つという点において共通しているが、とりわけFaulknerとWrightの作品は奇妙なまでの共通点を持っている。両作品とも洪水の中で救出作業を行った人間に焦点を当てており、さらに両作品とも妊婦救助をテーマとする。Faulknerの洪水小説“Old Man”は「二重小説（ダブルノヴェル）」*The Wild Palms*の一部として1939年に発表された。一方、Wrightの洪水小説“Down by the Riverside”がおさめられた*Uncle Tom's Children*は1938年の春の出版であるので、Faulknerの作品よりも一足早い出版である。このように発表時期をほぼ同時期にしているためにその影響関係を探ることは難しいが、Faulknerが白人男性の視点から物語を構築するのに対し、黒人のWrightは災害にあってもなお生々しく存在する人種差別の問題に取り組んでおり、同じ場所とテーマを扱いながらも、視点の異なる作品が出来上がっていることは極めて興味深いといえるだろう。本稿では、洪水という災害がどのように文学のテーマとして発展しているかについてこの二つの作品に焦点を当て検討するが、とりわけ、両作家が妊婦の救助を題材に扱っている点を考察し、その妊娠、出産、堕胎の取り扱いについて検討したい。

１．*The Wild Palms*における自然と出産

１.１．“The Wild Palms”における婚外恋愛・妊娠・堕胎

小説*The Wild Palms*は“The Wild Palms”と“Old Man”という二つの物語により

構築される。大まかにいうならば、“The Wild Palms”は白人女性の婚外交渉と堕胎をめぐる物語であり、“Old Man”は洪水における白人妊婦救助の物語である。批評家Malcolm Cowleyはこの二つの物語が別々の作品として独立しており、実際、別々の作品として扱ったほうがよいと言って、*The Portable Faulkner*というアンソロジーに“Old Man”を一つの短編小説として収めている。[5] ただし、この二つの物語はどちらも妊娠・出産を取り扱っているという点では関連性がなくはない。すなわち“Old Man”の部分においては、出産の神秘は自然の神秘と緊密に結びついており、それが“The Wild Palms”における「自然」に逆らい堕胎手術を試みようとするエリートたちの描写と対称をなしているのである。

“The Wild Palms”はニューオーリンズの裕福な白人を主人公とする。物語はニューオーリンズ出身の医師の海辺の別荘にHarry WilbourneとCharlotte Rittenmeyerが滞在する場面から始まり、その地点から時間軸を遡るという構造をとっている。別荘の持ち主である医師はこのカップルが結婚していないこと、また女の体の調子が悪そうなこと、男のほうが料理をしていることなどをつぶさに観察しているが、ある夜Harryから往診を頼まれる。女が出血しているというのである。この時点で、物語はHarryとCharlotteの出会いの場面へと転換する。ニューオーリンズの病院でインターンをするHarryは27歳の誕生日に友人に誘われて出向いたパーティで小柄な若い既婚女性のCharlotteに出会う。Charlotteは二人の子供の母親で、口紅の他にはほとんど化粧気がなく、片頬には古い火傷の痕がある。決して誘惑的な美女ではないCharlotteだが、二人はパーティでの出会いをきっかけに何度も会うようになり、親密さを増していく。だが、Charlotteの夫はカトリック信者であるために離婚ができない。またHarryにはCharlotteと駆け落ちする金銭的余裕もない。そのような折、Harryは偶然、1,000ドル以上の紙幣の入った財布を拾い、そのお金で二人はシカゴに逃避行を遂げるのである。

この小説で最も興味深いのは、二人の愛の生活がCharlotteの妊娠と堕胎により崩壊するという物語展開である。この物語の最後ではCharlotteは堕胎手術を受けて出血多量で死亡し、初心な医大生Harryは不法な堕胎手術を行い、女性を死亡させた罪で刑務所入りとなるが、この問題は当時の時代背景と共に考察するならば、より興味深いものとなる。そもそも婚外恋愛と、その結末として起る「望まざる妊娠」という「悲劇」は、18世紀の煽情小説のお決まりの筋立てである。例えばSusanna Haswell Rowsonの*Charlotte Temple*（1794）は19世紀を通じて最も読まれた煽情小説のひとつだが、ヒロインのCharlotteが悪い男性に誘惑され、駆け落ちした挙句、妊娠した身で捨てられ、未婚のまま出産をし、その時に命を落すというのがそのあらすじである。Faulknerが社会の規範から外れた恋愛をする女主人公にCharlotteという名前を与えた理由に*Charlotte Temple*の影があったかどうかはわからないが、FaulknerのCharlotteはその悲劇的な結末にも関わらず、自主性を持った「新しい女」として描き出されているという点に大きな違いがある。FaulknerのCharlotteは誘惑されて、駆け落ちするのではなく、自分の意思でHarryと逃避行をする。また彼女はHarry以上に実務的な能力を持っており、逃避行中の生活も、まずはCharlotteが針金で小物を作って、生活を支えるのである。妊娠に気がついてもCharlotteにとって一番大切なのはお腹の子どもではない。彼女は何とか子どもを育てようというHarryの言葉を完全に無視し、子どもを持つことは無理であることをHarryに論理的に話

してきかせ、「堕胎」手術の施行を促すのである。Charlotteに表象されるのは、人生を自分の意志で切り開き、自分の好きなように生きることを望む現代女性なのである。[6]

Charlotteのような自由で、性的にも自立した女性の登場の背後には、20世紀初頭のバース・コントロール運動があるといえるだろう。「バース・コントロール」という用語をMargaret Sangerが使い始めたのは1914年といわれるが、この運動は瞬く間に女性たちの間で支持されるようになった。しかし、ピルの開発は1960年代まで待たねばならず、バース・コントロールが可能になったとはいっても、ペッサリーに頼る避妊法には限界があり、Charlotteのように望まない妊娠の可能性は十分にあったのである。またこの時代は、中絶とバース・コントロールの間には深い溝があり、Sangerを始め、バース・コントロール運動に関わる人たちも堕胎に対しては、冷ややかな態度を隠さなかった。当時、堕胎は売春と結び付けられ、健全な家族計画の領域に属さないものと見なされていたのである。[7] このことは、Charlotteが妊娠したときに医者であるHarryがまず売春宿に堕胎薬を求めて足を運ぶ場面からも推察することができる。実際、ピューリタン的な気質の強いアメリカでは堕胎をタブー視する風潮は強く、1900年までにケンタッキー州を除く全ての州で堕胎禁止法が成立していた（Mohr 229)。つまり堕胎はヤミで行われるしかなかったというのが当時の現実だったのである。[8]

さらに、Charlotteのケースを考察するためには、1930年代のアメリカにおいて堕胎が大きな社会問題となっていたことも見極めなくてはならないだろう。不法な堕胎は常に行われていたが、大恐慌の時代には、生活苦から中絶を求める人口がラディカルに増加するのである。Harryが最初に堕胎手術を行うのはユタの鉱山である。この鉱山ではハンガリー人たちが労働を続けているが、実は既に会社は倒産しており、賃金は未払いとなっている。彼らは購買部の物品によって生活しているにすぎない。ここでHarryは鉱山監督の妻の堕胎手術を150ドルで依頼され、それを引き受ける。Harryの手術は成功するが、1936年の調査では、堕胎で死亡する女性の数は年間１万５千人と見積られている。自力堕胎も多く、それはしばしば命の危険を伴うものであった。[9] またこのような風潮の中でコンドームなどの避妊用具を作る産業は1930年代にラディカルに発達をとげるが、法的規制や医学的な承認もなく販売されたため、役に立たないものも多かったという（Tone 307)。Harryも売春宿に行った後、薬局で堕胎薬を５ドルで購入するが、錫張りの箱に入った錠剤はコーヒー豆のように見える。薬屋はこの薬を飲んだ後にウイスキーを飲み運動すれば効き目が増すといって「薬」を処方するが、結局何の効果もなく、Harryは「薬」はコーヒー豆だったと結論づける。医者のHarryが偽薬を高価な値段で買わされるのは何とも滑稽だが、明らかにHarryは1930年代に搾取された消費者の典型といえよう。*The Wild Palms*は1939年に発表されているが、堕胎というテーマ設定の背後には、堕胎をする女性を決してサポートしようとはしない因習的なアメリカ社会と大恐慌の現実の狭間で苦しむ人間たちの姿が見えてくるのである。

Faulknerの堕胎に対する態度は、しかしながら、両義的である。“The Wild Palms”においてFaulknerはHarryとCharlotteに同情的でありながらも、同時に堕胎を、身体・生命をコントロールできるとする現代科学の知の奢りとして戒めている。また、John Duvallが指摘するところだが、“The Wild Palms”にはジェンダー役割の逆転が描きこまれており、文明人Charlotteが脱女性化されていることにも注意が必要である。[10] 19世紀的な意味

では女性の属性としてもっとも大きな属性である母性を否定し、愛の世界に生きようとする都会人Charlotteの死には、文明、あるいは科学の敗北が書き込まれていると考えられよう。FaulknerはHarryとCharlotteに対し同情的ではあるが、彼らの愛を理想化はしていない。Charlotteは、愛は不滅であることを説く恋愛至上主義者であるが、HarryとCharlotteの愛は何も生み出さない不毛な愛であることが“The Wide Palms”とは全く正反対の南部人を主人公とする“Old Man”により、強調されていくのである。

1.2. 自然への畏怖—“Old Man”における洪水と妊婦

南部の貧困層の人間たちを主人公にした“Old Man”の物語は、生の賛歌として描かれている。“Old Man”というのはミシシッピ川を指している。時に人間を破滅させるまでの猛威をふるうミシシッピ川は明らかに人間の力を超えた神のような存在である。この“Old Man”の部分において興味深いのは、主人公の「のっぽの囚人」と臨月を迎えた避難民の女性は、HarryとCharlotteと違って、全くの他人であることである。HarryとCharlotteは、肉体をも超えた不滅の愛を信じる恋愛至上主義者だが、“Old Man”に登場する人物たちには、中産階級のHarryとCharlotteのような「高尚な」愛の観念はない。彼らは同じ南部白人といっても、教養人のHarryとCharlotteとは別の階層に属する人間たちである。だが、エリート階層のHarryとCharlotteが、互いを求め合い、愛し合いながらも、文明の中で自滅していくのに反し、無教養な囚人と臨月の白人女性は、特別な感情で結ばれているわけでもない他人同士であるにも関わらず、二人で協力し、自然災害の中、逞しく生き延びていく。

“Old Man”の洪水描写は力強くリアルである。最初のシーンでは囚人たちは新聞で報じられる洪水のニュースに聞き入っているが、1927年の4月、5月のアメリカ国内の新聞の第一面が洪水の記事であったことはJohn M. Barryも*Rising Tide: The Great Mississippi Flood of 1927 and How It Changed America*（1997）に記している。ここでFaulknerは、黒人たちが堤防防備のために強制労働させられている新聞記事に囚人たちがひきつけられている様子を描いている。

> Perhaps what actually moved them were the accounts of the conscripted levee gangs, mixed blacks and whites working in double shifts against the steadily rising water; stories of men, even though they were negroes, being forced like themselves to do work for which they received no other pay than coarse food and a place in a mudfloored tent to sleep on——stories, pictures, which emerged from the shorter convict's reading voice: the mudsplashed white men with the inevitable shot-guns, the antlike lines of negroes carrying sandbags, slipping and crawling up the steep face of the revetment to hurl their futile ammuntion into the face of a flood and return for more. (25)

監獄の中にあって、白人の囚人たちは、堤防防備のために強制的に無賃労働を強いられる黒人たちに強い同情の気持ちを寄せる。散弾銃をもった白人が、砂袋を担いだ蟻のような行列の黒人たちを見張る様子には、洪水という自然災害の中でより強烈に機能する人種

差別のシステムが浮かび上がる。Barryによれば、黒人たちは彼らの意志に反して留まらせられていたが、キャンプでは警備隊の白人による暴力やレイプなどの犯罪も多発していたという。5月、6月にはアーカンソー、テネシー、ミシシッピのキャンプでは、リンチも多発し、洪水は南部のアフリカ系アメリカ人に自然災害以上の苦しみをもたらしたのである（Barry 382-83）。

さらにFaulknerは家畜という資産を何とか助けようと屋根の上に上げようとする人々を描写しているが、人的被害だけでなく経済的被害の大きさも洪水被災者に大きなダメージを与えたことは確かである。しかし、当時の大統領であったHerbert Hooverは、政府の被災援助は非直接的なものであるべきと考えていた。小作人（シェアクロッパー）を含め農業にたずさわっていた者たちには2週間分の食料、家具、農具、作物の種などが供給され、家を失った者にはテントや簡易ベッドなどが供給されただけで、政府はほとんど洪水被害者を援助しなかったのである（Barry 371）。“Old Man”でも囚人と妊婦を助けるのは政府でも赤十字でもない。彼らはアカディア人に助けられる。アカディア人とはニューオーリンズよりも西の地域に住む、カナダから移住してきたフランス人の末裔であるが、「ケイジャン」という呼称のほうが現在では一般的であろう。囚人たちが、洪水に流され、ついには異文化の人々に助けられるというくだりは、アメリカ政府への南部人の不信の裏返しとしても、また様々な人間が暮らす南部という土地の多様性を示すものとしても考察に値する。ちなみに妊婦が子どもを産むために上がった土地は、バトン・ルージュのインディアン塚である。アメリカ南部には多くインディアン塚が現在も残っているが、それらは10世紀頃のものと推定されている。自然と共生したネイティブ・アメリカンの土地が出産シーンに選ばれるのは象徴的ともいえよう。

ところで“Old Man”において臨月の女性は救助されるまで木にしがみついて待っているが、救助された後、陸に上がると、ほとんど「自然」の環境の中で出産する。この唐突さは“Old Man”にある種の違和感を感じさせる。しかし、ＰＢＳ制作のドキュメンタリー、*Fatal Flood: American Experience*には、1927年の洪水時に妊婦を救助し、その出産に立ち会ったという男性の証言もあるので、単なる虚構とは片付けられないエピソードであろう。しかし、こういった現実以上に、この時代の男性作家たちが好んで非常時の出産をテーマとして作品を書いていることは文学作品解釈では重要な鍵となるように思われる。まず、思い出されるのは、Faulknerと同時代人であるErnest Hemingwayが*A Farewell to Arms*（1929）において描くCatherineの死である。彼女は戦地に看護師として赴き、その後ローザンヌの病院で数時間の苦闘の末に死児を産み、出血多量のために死亡する。またHemingwayの作品には“Indian Camp”というチェロキー族の女性の出産に焦点をおいた短編小説がある。この作品で主人公の少年は医師の父親が難産で苦しむチェロキー族の女性の出産の往診に行くのについて行くのだが、バカンスの最中にインディアン部落へ呼ばれた父親は医療器具を持っていなかったため、ジャックナイフをメスの代用として麻酔なしの帝王切開で出産させる。その他、Faulknerの*The Wild Palms*と同じ年に出版され、洪水と出産というテーマを描いた作品にJohn Steinbeckの*The Grapes of Wrath*（1939）がある。この小説の最後でJoad家の娘Rose of Sharonが死産をしているが、この出産は洪水の難を逃れた丘の上の小屋で行われている。この作品では出産描写と洪水描写が最後の数ページにわたり詳しく描かれている（612-19）。出産を助けているのは、

医者ではなく母親である。出産は自然分娩だが、死産に終わる。

このように見ていくと、生死をかけた出産というテーマは20世紀初頭のアメリカ文学の中に貫通する一つのテーマと考えることができるだろう。20世紀を迎え、すでにアメリカ女性たちは2年おきに出産を強いるような理不尽な妊娠からは解放されつつあったが、出産の危険性はまだ強く意識されていた。19世紀後半から20世紀前半のアメリカにおいては、出産が「医学化」され、出産の助産者が女性の産婆から男性の医者へ、出産場所が家から病院へとラディカルに推移しており（鈴木 10)、出産も妊娠も、もはや女性だけの領域に存在する神秘ではなくなっていたが、出産は、医学化されるにつれ、それが個人や家庭では処理しきれないものと見なされるようになってきた。しかし実際、出産が「医学化」されたにも関わらず、産婦死亡率は下がっていない。産婦の死は、ニューヨーク市の資料では、1910年代から30年代にかけて1000の分娩に対し5人という高率を維持している(Leavitt 332)。この意味で、医学への期待と不信、「自然」に対する畏怖の念、「コントロール不可能」な人間の性と生の神秘へのアンビバレントな感情がこの時代の作家たちの心の中に共通してあったことは推測できるのである。

ところで“Old Man”では、囚人にも、臨月の女性にも、最後まで名前が与えられない。また洪水の経験を通じて、この男女は多くの時間を一緒に過ごすが、二人の関係は全く発展しないのである。「のっぽの囚人」は初めて木にしがみつき救助を請う妊婦を見たときに、その女は彼に妹があれば妹だといえなくもないだろうし、妻があれば、妻だともいえるような女であったという感想を持っている。これはHarryにとって火傷の痕を頬に残すCharlotteが特別な存在であったことと比較すると面白い。「のっぽの囚人」にとって妊婦は特別な存在でないがゆえに、身近であり、家族愛の対象となるのである。しかしこの二人は避難生活の一ヶ月もの間、擬似家族として生活しながらも、決して性的な接触を持たない。「のっぽの囚人」は女を身近に感じてはいるが、母となったその女性は彼にとっては神聖な存在であり、安易に性関係を結ぶことはできないのである。

一方、個人を超えた不滅の愛について語るCharlotteとHarryは生々しい性の現実の中で破滅していく。とりわけ理念的なCharlotteの愚かしさは、彼女が夢想する水死が“Old Man”という洪水物語と並べられることにより浮き彫りになる。Charlotteはニューオーリンズのポンチャートレイ湖を見ながら、次のように述べている。

> “I love water,” she said. “That's where to die. Not in the hot air, above the hot ground, to wait hours for your blood to get cool enough to let you sleep and even weeks for your hair to stop growing. The water, the cool, to cool you quick so you can sleep, to wash out of your brain and out of your eyes and out of your blood all you ever saw and thought and felt and wanted and denied . . . .” (49-50)

Charlotteは、身体が冷え、全ての記憶が失われるであろう水死を恍惚として語るが、Charlotteの死に対する夢想は、洪水の水に押し流されながらも何とか生き抜こうともがく人間たちの苦闘と比較すると、あまりに非現実的で、弱々しい。Zora Neal Hurstonの*Their Eyes Were Watching God*では“De lake is coming”（153）と湖の水が溢れ、濁

流となって襲ってくる恐怖が描かれるが、洪水災害と無縁なCharlotteは恍惚として湖の水面を見つめる。堕胎による血の洪水が彼女を飲み込むまで、Charlotteは本当に「生」を意識することなく生きている人物であるといえよう。

このように*The Wild Palms*においてFaulknerは、洪水という自然災害と女性の出産・中絶問題を結びつけ、自然の一部としての生を提示して見せている。「のっぽの囚人」と白人女性は、自然の一部となって生きることを選ぶことにより、素朴な人間の生の型となる。一方、HarryとCharlotteは「自然」に逆らうことにより、罰を受ける。しかしFaulknerが、HarryとCharlotteのような人間たちにも同情の眼差しを注いでいることは注目すべきであろう。Harryは、"between grief and nothing I will take grief" (273) と人生において、無ではなく悲しみを取ることを選択する。明らかに彼は、悲劇的な生を選ぶことによって人間性(ヒューマニティ)を具現するFaulknerの小説世界における南部エリート青年の典型なのである。[11]

2．"Down by the Riverside" と病院という悪夢

2.1．Richard Wrightのシュールレアリスム

1927年のミシシッピ川大洪水を題材とした短編小説 "Down by the Riverside" は*Uncle Tom's Children* (1938) に収められている。この*Uncle Tom's Children*というタイトルには、アフリカ系アメリカ人が、「善良な黒人」であろうとすればするほど、アメリカの人種差別社会の中で踏み石にされることを告発するWrightの精神が具現されている。ちなみにJames Baldwinは*Notes of a Native Son* (1955) においてUncle Tomというステレオタイプを糾弾しているが (16-17)、この善良な黒人というステレオタイプが1950年代においてアフリカ系アメリカ人のアイデンティティ構築の中で非難の対象となった保守的な黒人像であったことは興味深い。しかし、そもそもUncle Tomへの批判はBaldwin独自の論点ではない。すでに1920年代にAlain LockeはUncle Tomを白人に従順な古い世代の黒人の典型としてみなし、文学における新しい黒人像(ニューニグロ)の創造の必要を唱えていた。そのLockeが "The Negro: 'New' or Newer: A Retrospective Review of the Literature of the Negro for 1938" という記事の中でWrightの*Uncle Tom's Children*を新しい時代の黒人小説として激賞したことは、LockeがWrightの描く人物に、Uncle Tomとは異なったアフリカ系アメリカ人の姿を見いだしたからに他ならないだろう。[12] *Uncle Tom's Children*は現代黒人抗議小説の始まりを告げるものとして現在でも高く評価されているが、Uncle Tomという「善良な黒人」のイメージを逸脱していくアフリカ系アメリカ人青年の姿を描くことで、Wrightは人種差別的なアメリカ社会に決然と抗議する新しいアフリカ系アメリカ文学を創造しようとしたのである。

しかし、Wrightの本質は単に抗議小説の作家であることだけではない。文学者としてのWrightを評価するには、彼の作品が不条理文学と深く関係していることを認識することが必須となるだろう。思想的にもWrightは共産主義から実存主義への傾倒を強めていくが、Wrightの作品にはシュールレアリスム的な色彩を持つものが多い。Wrightが幼少時より強く意識したと*Black Boy*で語る実存的恐怖は、彼の心に深い影を投げかけており、それは作品において悪夢として表象され続けたといっていいだろう。実際、Wrightの洪水描写は、Faulknerの洪水描写に比べ陰鬱である。Faulknerの場合、リアリスティックな洪水描写の中で、蛇を描写するなど、神話的なイメージを用いている点においてモダニズ

ム的な特徴があるといえるが、Wrightの場合は、シュールレアリスム的な実存の悪夢がその小説世界を支配する。洪水という災害時においての人種抑圧を鮮明に描いた“Down by the Riverside”は、リアリズム小説として評価してこそ価値あるものなのかもしれないが、作品において、悪夢のような事件が連続的に起こる様子は、すでに作品がリアリズムの枠を越え、人間の内面の恐怖に焦点があてられていることを示す。そしてその恐怖は、現実と幻想とがその境界を失うほどに切迫した状況を浮き彫りにしているのである。人種差別の世界を生きるということは、それほどまでの恐怖と隣りあわせに生きることなのかもしれない。André Bretonの*Le Manifeste du Surréalisme*が発表されたのは1924年のことであるが、1948年にはWrightはBreton本人と会っている（Fabre 17）。その影響関係を探ることは難しいが、Wrightのシュールレアリスムへの関心を示す一つのエピソードであるといえるだろう。

“Down by the Riverside”は、家が水没しそうになり、主人公のMannが呆然としている場面から始まる。Mannの家では、臨月を迎えた妻のLuluが苦しんでいる。Mannはなぜ早く避難しなかったのかと悔やむが、彼は洪水がこれほどひどくなるとは想像していなかったのである。2005年のハリケーン・カトリーナの際も、避難勧告が出ていたにも関わらず、避難しようとしなかった市民に対し、メディアが冷たい視線を投げたことは記憶に新しいが、Wrightは誤った判断をしてしまったMannに対し同情的である。Mannは水が引いたら、少しでも早く畑で作業を始めたかったのである。それゆえに洪水を楽観して自宅に留まったのだが、洪水はこれまでにない規模のものであった。臨月の妻を抱え、なんとか避難しなくてはならないと焦るMannは、弟のBobに騾馬とボートを交換してくるように頼むが、騾馬を売ってもボードを買えるお金にならないことを悟ったBobは白人の家からボートを盗んできてしまう。Mannは盗みを受け入れることができないが、緊急時であるので、そのボートでLuluを病院まで連れて行くことにする。しかし洪水の流れのため、なかなか目的地にたどり着けず、ある家で電話を借りようするが、その家の白人はMannのボートが盗んだものであると非難しMannに発砲する。絶対絶命のMannは自己防衛のために白人の男に向けて発砲し、彼を射殺してしてしまう。その後Mannはやっとの思いで病院に辿りつくが、医者はLuluがすでに死亡しているとMannに告げる。Mannは診察室から追い出され、堤防のほうへ行くように言われる。ところが病院を出ようとするMannに白人兵士が近づいてきて、ボートが足りないので貸すように命令される。また土手を作る作業をするよう命じられ、強引に連れて行かれる。だが洪水で土手は瞬く間に決壊してしまう。その後、Mannは人々を救助する仕事を命じられ、自分が殺した白人男性の妻と子どもを助けにいくことになる。子どもはMannを見て、彼が父親を射殺した黒人であると叫ぶ。Mannの言い分は聞いてもらえず、Mannは犯罪者として連行されようとするが、逃げようとして、撃たれるというのがこの短編小説のあらすじである。

次々に起こる予測外の事件に翻弄され続ける善良な夫Mannの物語は、*Native Son*の主人公Bigger Thomasを彷彿させるWright独自の筋立てといえる。この作品には、アフリカ系アメリカ人女性の人命救助よりも、ボートの盗難を重く見る白人社会、人種差別的な病院のシステム、アフリカ系アメリカ人に労働を強制する軍の支配力、白人女性のヒステリックな被害妄想など、アフリカ系アメリカ人であるからこそ経験する様々な差別とその差別的な眼差しに対する恐怖感が描かれており、人種的マイノリティの視点から描かれた力強

い洪水小説となっている。しかしFaulknerの作品と同様、Wrightの妊婦描写はこの作品に複雑な問題を投げかけている。Mannは難産で苦しむ妻を見て、病院に連れて行くべきであるという判断を下しているが、そもそも1920年代においてどのくらいの人数のアフリカ系アメリカ人女性たちが出産に病院を利用していたのだろうか。アメリカでは1920年代では約60パーセントの人が自宅で出産している。病院と自宅の出産が半々となるのは1938年である（鈴木 10)。しかしこのデータはエスニシティによる差異を明確にしていない。そもそも、アフリカ系アメリカ人女性は奴隷制の時代からgranny midwifeと呼ばれる産婆によって出産を行っており、ヘルスケアのシステムが整っても、多くの女性たちが無免許の産婆を利用したとも言われている（Nelson 101)。それはアフリカ系アメリカ人女性にとっては、白人の医者よりは、同じ人種の女性のほうが信頼ができる存在であったからに他ならないし、また保険の問題もあった。日本のような国民保険がないアメリカでは個人個人が保険会社と契約するため、貧困層では保険に入っていないために病院に行けない人が現在でも多くいるが、かつては黒人を加入させない保険会社すらあったという（Nelson 103)。さらに深南部では1960年代においてもアフリカ系アメリカ人は病院をほとんど利用していなかったとことを考慮するならば、1920年代の南部の小作人が、緊急事態に病院を頼るという発想しかしないことには違和感が残る。またLuluの死も唐突である。実際Luluの分娩の苦しみは、ちょうどFaulknerの“Old Man”において分娩がほとんど空白の中で行われるのと同様、ほとんど描写されていない。必死の思いで妻を病院に運ぶと医者はMannにLuluは既に死んでいることを告げる。しかもここで医者は全く子供の生死を問題にしていない。Luluの死は、その前後が曖昧な悪夢ようなものとして描写されるのである。

この場面はリアリズムを越えた解釈を必要とする場面といえるだろう。すなわち、死体として登場する妊婦Luluはグロテスクなまでの死の象徴であり、それは洪水の破滅的な力の象徴なのである。Faulknerがどんどん水かさを増すミシシッピ川に豊穣な生命のイメージを投げかけるのとは反対に、Wrightは洪水の破壊的なイメージを妊婦の死体といった猟奇的なイメージを通して表象していくのである。ここには人種差別社会の中で妻を守りきれないアフリカ系アメリカ人男性の男性性に対する不安感と同時に「女性の死体」に対するWrightのフェティッシュでマゾヒスティックな悪夢があるといえる。「死体」は、Faulknerが“A Rose for Emily”などで好んで用いるゴシック的なイメジャリーのひとつであるが、Faulknerの場合、屋敷の奥に長い間隠され、腐敗した男性の死体には、滅びゆく南部貴族の文化が表象される。一方、Wrightの場合は、死体が常に女性の死体であるところに特徴がある。無抵抗な肉体としての死体が持つエロティシズムは、*Native Son*において、白人女性の身体を媒体とすることで、アフリカ系アメリカ人男性がその内面に抱くレイプの冤罪とリンチへの悪夢を象徴するが、死体の猟奇的でグロテスクなイメージは、Wrightの作品が単なるリアリズムの枠組みからだけでは十分に鑑賞できないことを示すものなのである。

2.2. Luluの死が意味するもの—医療・バース・コントロール・人種差別

さらに私が問題としたいのはWrightによる病院の描写である。Mannは病院につくと、ドアの前の兵士に“Where you going?”と声をかけられる。“Ah got mah wife, suh. She sick . . . .”と答えるMannに兵士は“Straight on to the back, till you see the sign”

(86) と指示する。だが見えたサインとはEmergency Room（救急処置室）の表示ではない。それは“FOR COLORED”という差別の記号なのである。そしてそのドアを開けるMannを迎えるのは、白人の看護師であり、白人の医者である。医者はLuluを一瞥して“Well, boy, shes dead”(87) と言う。病院は決してMannにとって救済の場ではないばかりか、命の重みを人種によって分け隔てる差別的で非人間的な場所を象徴するのである。医者はなぜもっと早く連れてこなかったのかとMannを責めるだけで何の同情も示さない。実はこの作品において重要なのは、妊婦Luluがなぜ死んだのかではなく、どこで死んだのかという点に尽きるといえる。

ここで私たちは、歴史的に、病院という機関とアフリカ系アメリカ人の関係がいかに歪んだものであったかを振り返る事が求められる。医療機関における倫理は現在でも様々な問題を投げかけているが、アメリカ南部ではアフリカ系アメリカ人に対する医学的虐待は様々なレベルで行われていたことが報告されている。とりわけ有名なのが1932年から1972年の間に末期梅毒患者のアフリカ系アメリカ人を集め、病気を知らせることも治療をすることもなく、末期梅毒の身体症状を調べたタスキーギ実験である。これらの患者の大半は教育を受けない文盲の小作人（シェアクロッパー）で、彼らは無知のために実験材料にされたのである。病院に入ったら死んで帰ってくるという思い込みは南部のアフリカ系アメリカ人の間では強くなり、人種差別的な医療機関への不信感のため1960年代以前では、南部地方のアフリカ系アメリカ人たちはほとんど医療サービスを受けていなかったという (Nelson 104)。

さらに視野に入れておかなければならないのは、アフリカ系アメリカ人女性たちが歴史的にどのようなヘルスケアを受けてきたか、またアフリカ系アメリカ人女性のリプロダクティブ・ヘルスへの道はどのように白人女性のそれと違ったのかという点である。バース・コントロール運動はSangerなど白人女性が先導する形で進められたが、1920年代から30年代を通じて、アフリカ系アメリカ人の間でもバース・コントロールについての議論は加熱した。Marcus Garveyは、ブラック・ナショナリズムの立場から、バース・コントロールには反対した。バース・コントロールは、自然や神の意思に反するというのがその主張であったが、何よりも人種の根絶を危惧したのである。またハワード大学のDean Kelly Millerはアフリカ系アメリカ人女性たちが子どもを持ちたがらないことを人種的自殺行為と非難した (Rodrigue 296)。しかし、それに対しジャーナリストのJ. A. Rogersはアフリカ系アメリカ人女性が家庭や子供から解放されるのは黒人の社会的な地位の向上のためにはよいサインであると*Messenger*の7号で論じている (164-65)。W. E. B. Du Boisも出産における女性の自己決定の必要性を説いている。[13]

一方、1920年から30年代におけるアフリカ系アメリカ人女性たちのリプロダクティブ・ヘルスへの意識はどのようなものだったのか。この手がかりとしてあげられるのが、1928年に出版されたNella Larsenの*Quicksand*である。この作品はエリート混血女性Helga Craneを主人公とするが、印象的なシーンのひとつとして、Helgaが婚約者James Vayleとの結婚を断る場面がある。この時、Helgaは次のような言葉を述べる。

> Marriage——that means children, to me. And why add more suffering to the world? Why add any more unwanted, tortured Negro to America? Why do Negroes have children? Surely it must be sinful. Think of the awfulness of

being responsible for the giving of life to creatures doomed to endure such wounds to the flesh, such wounds to the spirit, as Negroes have to endure. (104)

ここでHelgaは結婚と子供を結び付けている。この考え方はバース・コントロールが不可能であった19世紀的結婚の概念を想起させるが、同時に子供を持つことへのHelgaの懐疑性は1920年代に過熱したバース・コントロールの是非を問う議論とも繋がるものといえるだろう。ここでHelgaが問題としているのは、苦しみを担ったアメリカ黒人という存在を再生産することの意義である。これに対しJamesは、自分たちのようなエリートこそ子供を持たなければならないと、エリート主義的で優生学的な視点から子供を持つことの意義を語る。二人の意識の差は、二人の所属する階級とジェンダーの違い——Jamesは黒人中産階級の出身の男性であるが、Helgaは労働者階級の白人の母親をもつ混血女性である——から派生したものと考えられるが、*Quicksand*において、Larsenは徹底して出産に否定的な意味を与える。小説の最後では、南部の黒人牧師の妻となったHelgaが度重なる出産で身体を壊し、結婚という制度を呪いながら、死んでいく姿が描かれる。明らかにLarsenは女性に不本意な出産を強い、その肉体と精神を衰弱させる当時の結婚のあり方を批判しているのである。このように*Quicksand*には、出産の制限を望むアフリカ系アメリカ人女性たちの姿が浮かび上がる。アフリカ系アメリカ人女性はバース・コントロールに興味を示さないという偏見があるが、Jessie Rodriqueも述べるように、アフリカ系アメリカ人女性による性の管理は、白人女性たちのものと、一般に予測される以上に連動していたといえよう。

しかし、また同時に、アフリカ系アメリカ人女性にとってバース・コントロール革命が白人女性とは別の側面を持っていたことを忘れてはならない。というのも、バース・コントロールはその運動とほぼ同時に、劣等な人種や階級の人間の人口を抑制しようとする優生学思想と結びつきを強め、有色の女性たち——とりわけ貧困層の女性たち——を抑圧し始めるのである。Angela Davisによれば、1919年までに優生学はバース・コントロール運動を支配したという。アメリカの白人種が黒人種によって置き換わることを防ぐことがバース・コントロール運動の意図として公に提唱され始めたのである。1932年までに優生学協会はアメリカの26の州で強制的な避妊手術を認可する法律を通過させ、多くの「不適切な」人間は生殖できないように手術されていた（Davis 214)。Faulknerの*The Sound and the Fury*では、Compson家の精神薄弱児のBenjyが去勢手術をされているが、このような手術はアフリカ系アメリカ人も対象となっていたのである。1936年にDu Boisは「我々が警戒しなくてはならないのはいわゆる優生学的去勢である」と人種をターゲットにあてた避妊手術について、アフリカ系アメリカ人に注意を促している（Rodrique 298)。実際、第二次世界大戦までにアメリカ南部では多くの合意のない避妊手術が行われていたというが、その犠牲者のほとんどがアフリカ系アメリカ人女性であった。例えば、1955年のサウス・カロライナの州立病院で避妊手術を受けた23人は、全員アフリカ系アメリカ人女性であった。またノース・カロライナの優生学委員会は、1930年代から1940年代にかけて8000人を精神薄弱という理由で去勢したが、そのうちの5000人がアフリカ系アメリカ人であったという。1970年代はアメリカのバース・コントロールの方法として避妊手術が最も増えた時代で、手術患者は1970年に20万人だったのが、1980年には70万人に増えたというが、南部

の多くのアフリカ系アメリカ人女性は、十分な説明を受けず、日常的に避妊手術をされたという（Roberts 90）。“Down by the Riverside”において病院が悪夢の象徴であることは、このような現実を考えれば、十分納得のいくことだろう。Luluという社会の底辺を生きるアフリカ系アメリカ人女性の不条理な死の背後には、南部のアフリカ系アメリカ人の持つ病院に対する不信感が強くあらわれているのである。

結びにかえて

ところで、ハリケーン・カトリーナの被災者に対するアメリカ政府の支援の中で無料医療や感染症などに関する情報提供や無料の相談受付があるが、政府は妊婦、障害者、血友病患者に対しては特別のウェブサイトをもうけ、情報提供を行っている。この中で、被災女性への健康支援は、洪水の直接被害に留まらない。被災者は、避妊具やピルの無料支給や堕胎費の免除を受けることができる。このような支援は明らかに、女性のリプロダクティブ・ヘルスへの支援として評価されるべきであるが、避難民への無料の堕胎手術を、アフリカ系アメリカ人貧困層に対する体のよいコントロールとして捉える見方もある。例えば、ヒューストンとテキサス東南部の家族計画支援団体（PPHSET）は被災者女性のリプロダクティブ・ヘルスへのサービスとして、無料で、一ヶ月間分のバース・コントロール用品と緊急避妊キットを提供しているが、この団体が優生学や人口抑制を支援する団体から莫大な基金を得て、このような活動を行っていると非難する声も上がっている。[14] しかしながら、もちろん、黒人貧困層において、未婚の母やティーン・エイジャーの妊娠などは問題であり、リプロダクティブ・ヘルスの支援の必要性も明らかである。アメリカの人種問題の深さが現在の洪水問題に落す影はあまりに濃い。

このように考えていったとき、自然災害と文学における妊婦描写というものも、現実の女性のリプロダクティブ・ヘルスの問題とあわせながら、考察することは意味あることと思われる。本稿では、1927年の洪水をテーマとしたWilliam FaulknerとRichard Wrightの作品に焦点をあて、文学作品における洪水描写と女性の妊娠、出産、堕胎の結びつきを検討してきたが、文学作品の中で現実と想像が様々なレベルにおいて交錯している様が見えてきたといえる。ところで、2005年秋の*African American Review*においてJerry W. Ward Jr.はハリケーン・カトリーナの経験をアンソロジーにまとめる作業が始まっていることを報告している。果たして、ハリケーン・カトリーナがもたらした災害はどのような作品を生み出すのであろうか。災害の経験を無為にしないためにも、災害について語り、それを読みついでいくという行為は極めて重要なものとなるといえるが、それが文学という芸術表象に変わっていくときに織り込まれていく様々なイデオロギーを解き明かしていくことも、文学研究者の課題となるであろう。とりわけ、災害文学の中で、自然の猛威と女性の子宮との結びつきが、意識・無意識的に書き込まれていくことに対し、フェミニズム批評が何をすることができるかを再確認していくことも重要であると思われるのである。

＊ 本稿は2006年２月に黒人研究の会の例会で行った「ハリケーン・カトリーナとアフリカン・アメリカン」というパネルで発表した原稿に加筆したものである。パネリストの広島女学院大学教授森あおい氏、四日市大学教授山本伸氏、日本大学教授木内徹氏には発表にあたり多くのサポートをいただいた。ここに感謝を申しあげる次第である。

註

1) Harvard School of Public Health, Press Release 16 Sep. 2005<http://www.hsph.harvard.edu/press/releases/press09162005.html>を参照。
2) National Hurricane Center <http://www.nhc.noaa.gov/pastcost.shtml>を参照。
3) Nikkei Net <http://www.nikkei.co.jp>, 2006年1月30日の記事「カトリーナの被害額 過去最大の14兆6000億円」を参照。
4) "Mississippi Levee" は*Collected Poems of Langston Hughes* (New York: Vintage, 1994), 249におさめられている。なお、Hughesの詩については日本大学の木内徹氏が2006年2月の黒人研究の会で「カトリーナと黒人文学」と題する発表の中でとりあつかった。
5) "The second story is, however, more effective than the first, and I think it gains by standing alone, as in the present volume" (480) とCowleyは "Old Man" のほうを評価し、さらに独立させたほうがよい作品になると述べている。
6) ちなみにCharlotte のモデルはFaulknerの恋人のMeta Carpenterであるとの Ann Goodwyn Jones は述べている (145)。
7) 荻野『生殖の政治学』, 131-143.
8) AbortionとProstitutionについてはMarvin Olasky, *Abortion Rite: A Social History of Abortion in America* (Washington D. C.: Regnery, 1992) の第2章がくわしい。
9) 荻野『中絶論争とアメリカ社会』, 30. ただし、この数の大半は自力堕胎が大半を占める。*The Wild Palms*においては、堕胎手術の失敗の率は一万人に一人とHarryは述べている (192)。1930年代の中絶事情に関しては、Leslie J. Regan, "'About to Meet Her Maker': Women, Doctors, Dying Declarations and the State's Investigation of Abortion, Chicago, 1867-1940," *Woman and Health in America: Historical Reading, Ed. Judith W. Leavitt* (Madison: U of Wisconsin P, 1999) も参考にされたい。
10) Faulkner作品のクィア・リーディングを試みるDuvallはCharlotteのAndrogynyな側面を論じている。詳しくは*Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw and Unspeakable Communities* (Austin: U of Texas P, 1990) を参照。
11) 破滅していく南部の支配階層と生命力に溢れた貧乏白人の対比はヨクナパトーファ・サーガではCompson家とSnopes家に象徴される。また*The Sound and the Fury*のエリート南部青年Quentin Compsonが自殺の場所として川を選ぶことは、Faulkner作品における主要なテーマである水と死の問題を考える上で重要である。
12) "With this, our Negro fiction of social interpretation comes of age" とLockeはWrightを高く評価している。*Opportunity* 17 (1939), 8 参照。
13) W. E. B. Du Bois, "The Damnation of Women," *Darkwater: Voices from Within Veil* (New York: Dover, 1999) を参照。なお、バース・コントロールとアフリカ系アメリカ人についての議論はJessie M. Rodrique, Dorothy Roberts, Angela Davisの論文を参考にした。
14) "Planned Parenthood Solicits Funds to Offer Chemical Abortion for Hurricane Katrina Victims." *Life Site News,* 1 Sep. 2005 <http://www.lifesite.net/ldn/2005/sep/05090109.html>.

引用文献

Baldwin, James. *Notes of a Native Son.* Boston: Beacon P, 1955.

Barry, John M. *Rising Tide: The Great Mississippi Flood of 1927 and How It Changed America.* New York: Simon & Schuster, 1997.

Blendon, Robert J. "Survey of Katrina Evacuees in Houston Finds Half of Those Trapped in Homes Waited Three Days and More for Rescue: Many Had Chronic Health Problems and No Health Insurance." Harvard School of Public Health, Press Release. 16 Sep. 2005 〈http://www.hsph. harvard.edu/press/releases/press09162005.html〉.

Cowley, Malcolm, ed. *The Portable Faulkner.* New York: Viking P, 1946.

Davis, Angela Y. *Women, Race, and Class.* New York: Vintage, 1981.

Du Bois, W. E. B. *Darkwater: Voices from Within Veil.* New York: Dover, 1999.

Duvall, John. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities.* Austin: U of Texas P, 1990.

Fabre, Michel. *Richard Wright: Books and Writers.* Jackson: UP of Mississippi, 1990.

Fatal Flood: American Experience. PBS, 1993.
Faulkner, William. *The Wild Palms.* Ed. Noel Polk. New York: Vintage, 1995.
Hughes, Langston. "Mississippi Levee." *Collected Poems of Langston Hughes.* Ed. Arnold Rampersad and David Roessel. New York: Vintage, 1994.
Hurston, Zora Neal. *Their Eyes Were Watching God.* Ed. Henry Louis Gates, Jr. New York Harper & Row, 1990.
Jones, Ann Goodwyn. "The Kotex Age: Women, Popular Culture, and *The Wild Palms.*" *Faulkner and Popular Culture.* Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1988. 142-162.
Larsen, Nella. *Quicksand.* Ed. Thadious M. Davis. New York: Penguin, 2002.
Leavitt, Judith Walzer. "Under the Shadow of Maternity: American Women's Responses to Death and Debility Fears in Nineteenth-Century Childbirth." *Women and Health in America: Historical Readings.* Ed. Judith W. Leavitt. Madison: U of Wisconsin P, 1999. 328-46.
Locke, Alain. "The New Negro." *The New Negro.* Ed. Alain Locke. 1925; New York: Simon and Schuster, 1992. 3-25.
——. "The Negro: 'New' or Newer: A Retrospective Review of the Literature of the Negro for 1938." *Opportunity* 17 (1939): 8
Mohr, James C. *Abortion in America: The Origins and Evolution of National Policy.* Oxford: Oxford UP, 1978.
Nelson, Jennifer. "'Hold Your Head Up and Stick Out Your Chin': Community Health and Women's Health in Mound Bayou, Mississippi." *NWSA Journal* 17 (2005): 99-118.
荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会——身体をめぐる戦争』岩波書店、2001年。
——.『生殖の政治学——フェミニズムとバース・コントロール』山川出版、1994年。
Olasky, Marvin. *Abortion Rites: A Social History of Abortion in America.* Washington, D.C.: Regnery, 1992.
"Planned Parenthood Solicits Funds to Offer Chemical Abortion for Hurricane Victims." *Life Site News.* 1 Sep. 2005. 〈http://www.lifesite.net/ldn/2005/sep/05090109.html〉.
Regan, Leslie J. "'About to Meet Her Maker': Women, Doctors, Dying Declarations and the State's Investigation of Abortion, Chicago, 1867-1940." Leavitt, *Women and Health in America,* 269-92.
Roberts, Dorothy. *Killing the Black Body: Race, Reproduction, and the Meaning of Liberty.* New York: Random House, 1997.
Rodrique, Jessie M. "The Black Community and the Birth Control Movement." Leavitt, *Women and Health in America,* 293-305.
Rogers, J. A. "The Critic." *Messenger* 7 (1925): 164-65.
Steinbeck, John. *The Grapes of Wrath.* New York: Random House, 1939.
鈴木七美『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』新曜社、1997年。
Tone, Andrea. "Contraceptive Consumers: Gender and the Political Economy of Birth Control in the 1930s." Leavitt, *Women and Health in America,* 306-25.
Ward, Jerry W., Jr. "Katrina: A Matrix of Stories." *African American Review* 39 (Fall 2005): 279-80.
Wright, Richard. "Down by the Riverside." *Uncle Tom's Children.* New York: Harper Collins, 1989.